

平成 22 年(2010 年)11 月 23 日(祝・火)

きよたきでら のうにんじ

清滝寺・能仁寺遺跡発掘調査現地説明会資料

調査主体：滋賀県教育委員会

調査機関：財団法人 滋賀県文化財保護協会

1. 調査の経緯

清滝寺遺跡と能仁寺遺跡は米原市清滝(まいばらし きよたき)に所在する中世から近世の寺院遺跡です。南北朝時代から室町時代に守護大名として権勢を誇った京極(きょうごく)氏の歴代当主の墓所がある清滝寺徳源院(きよたきでら とくげんいん)を中心として南側と東方に広がる遺跡です。

今回の発掘調査は、清滝寺徳源院の南を流れる能仁寺川に計画された能仁寺川通常砂防工事にさきだち、発掘調査を実施するものです。平成 19～20 年(2007～08 年)に試掘調査を実施し、地下に遺構が残されていることを確認し、平成 20 年から本格的な発掘調査を継続してきました。今年度は発掘調査の最終年度にあたり、上流部分の全域(第 1 調査区)と、下流部分の一部(第 2 調査区)において発掘調査を実施しています。

今回報告します第 1 調査区は、能仁寺谷(ノネジダニ)と呼ばれ、能仁寺跡と伝承されている場所(能仁寺遺跡)です。

2. これまでの調査

第 1 調査区は平成 20 年に部分的な発掘調査を実施し、大規模な石垣、常滑焼の大甕を埋設した遺構、建物跡らしい小穴群がみつきり、遺跡が良好に残されていると予想されたことから、今年度は全域を対象に調査を実施しました。

また、平成 20・21 年には、下流部分(徳源院土塀の並びより東方)において発掘調査を行い、清滝寺に関連すると思われる坊院の一部らしい石垣造成の屋敷地、掘立柱建物跡、五輪塔の笠部を組み合わせた井戸、石組み溝、石組み暗渠などが見つかりました。

3. 調査地の概要

第 1 調査区では、さらに小調査区として T 1～T 5 を設けました。谷奥には 2 カ所の小さな平坦地に T 1・T 2 を設けましたが、遺構は見られませんでした。

能仁寺川は谷の上方(西半部)では谷の南側を流れていますが、なかほどで谷を横断して北側に流れを変えます。谷奥から能仁寺川横断箇所までを T 3 として全面発掘したところ、五輪塔の残骸が多数出土するとともに、2 基の中世墓が残されていました。

能仁寺川横断箇所より下流側（東方）は、段差をもって平坦地が2カ所にわかれ、その上段をT4、下段をT5として調査したところ、両方にまたがって方形基壇が検出されました。ここが寺院の中心部と考えられます。方形基壇の東辺からは山門跡とみられる遺構と、そこから東へ伸びる参道とこれに沿って築かれた大規模な石垣がみつかりました。T4・5は現在も調査を継続しています。

4. 調査の成果

(1) 主な遺構

中世墓1・2（ちゅうせいぼ）

T3では、三辺を石積みした長方形基壇の中世墓が2基発見されました。

中世墓1では蔵骨器（古瀬戸壺）（ぞうこつき（こせとつぼ））が出土しましたが、基壇に石塔は残されていませんでした。

中世墓2では基壇に5基の五輪塔（ごりんとう）の基礎が据えられ（1基は転落）周辺にはこれらに載っていた5基分の部品が散乱していました。能仁寺川の土石流で倒壊した状態で埋もれていたようです。5基のうち中央と右端（北端）の基礎の下には細かく砕けた焼骨が埋葬されていました。

このほか、墓地をおおっていた厚い土砂から200点以上の五輪塔・宝篋印塔（ほうきょういんとう）の部品が出土しています。中世墓のために造成されたとみられる平坦地もみられます。

出土した宝篋印塔の基礎に「貞治（三）年七月 日」（1363年）と彫られており、この一帯は南北朝時代から墓地として使用されていたことがうかがえます。

焼土坑（しょうどこう）

T3では焼土や炭が詰まった土坑がいくつかみつかりました。穴の周囲が焼けていましたが、これらが何を焼いた跡なのかは明確になりませんでした。

方形基壇（ほうけいきだん）

T4～T5で見つかった方形基壇は南北約12.5m、東西は不明瞭ですが約14mの規模で、寺院の中心的な仏堂があった区画と考えられます。北辺と南辺は石組み溝で区画されていますが、東辺は推定山門跡、西辺は北西隅の溝が確認できただけで不明瞭です。

基壇内部から掘立柱建物（一間×二間）がみつかりました。方形基壇との方位は異なり、仏堂の遺構ではないようです。このほかに基壇内部の建造物跡は後述の礎石・地覆石があります。

礎石・地覆石（そせき・じふくいし）

北辺溝の内側には、溝にそって4基の礎石とこれらをつなぐ地覆石が残されており、中心的仏堂の遺構の一部と思われます。この周囲には集石や焼土・焼けた壁材・少量の瓦がみられました。

木材埋設土坑 (もくざいまいせつこう)

方形基壇西辺付近の南寄りにみつかった巨大な土坑には、長さ約 2 m、幅約 0.2mの厚板を 2 枚並べて、方形基壇の方向にあわせて埋設されていました。板は側面にほぞを穿ち、小板でハギ合わせています。板の東端には瀬戸焼の小さな香炉 (こうろ) が置かれていました。板の下には土坑がさらに深く続いています。

山門跡 (さんもんあと)

T 4 と T 5 には段差があり、本来は方形基壇の東辺を区画していたと思われる。この段差の東約 3 m に山門跡らしい遺構が見つかりました。

小石を長さ 1.5m、幅 0.5m ほどの帯状に積み上げたもので、南北 2 カ所に分かれています。このうち南側のものには礎石と考えられる石が設置されています。礎石は後述する参道に敷設された大石垣の延長上にあること、方形基壇と参道が接する場所にあることから、これらは山門の遺構と思われる。北側の門礎石は失われていますが、南側と同様に礎石があったとすると、門の間口は 3 m 程度と考えられます。

方形基壇との間にある約 50 cm の段差には最近の改変が加えられていますが、寺院の当初から造成されていた可能性が高く、方形基壇の東辺をなすものと思われる。

参道と石垣 1 (さんどう と いしがき)

山門跡から東方はゆるく傾斜して下だり、山門の間口とほぼ同じ幅で、17 m にわたって砂混じり粘土が貼られていました。これにそって南側には長さ 14m 以上、高さ 1.5m の大規模な石垣 1 が築かれています。中心的仏堂があったと考えられる方形基壇と方位が一致し、推定山門跡をはさんで方形基壇につながることから、仏堂へ通じる参道と考えられます。

石垣 1 の東端は調査対象地の外へ続き、南から張り出す尾根に突き当たるようです。参道の東端はこの尾根を登って外へ抜けているのか、尾根の西裾をめぐる石垣 2 にそって徳源院境内の方向へ抜けていたのかは明確ではありません。

東尾根上の遺構

調査区東端にかかる尾根には、上述した西裾の石垣 2 のほか、これにほぼ直交する石列が検出されています。この石列の南側には参道と同様の踏みしめが段々を形成してみられることから、参道に続く階段であったかもしれません。

一 昨年 の 調査 では、東尾根上で建物跡になるらしい小穴群と、常滑焼 (とこなめやき) の大甕を埋設した 2 基の土坑が見つかりました。

石組み溝

参道の北側から長大な石組み溝が見つかりました。溝は参道上部では石垣 1 から約 6 m の間隔があります。南側の石組は能仁寺川にそって折れ曲がり

ながら東尾根の石垣 2 付近まで伸びています。この溝は方形基壇の北辺溝につながるようです。

(2) 出土遺物

大量の五輪塔を除くと、T 3 から出土した蔵骨器 2 個のほか、T 4・T 5 からは方形区画の溝、石組み溝などから土器・陶器類が出土しています。瀬戸焼の壺、碗、香炉(こうろ)、土師器の小皿、瓦質土器(がしつどき)の火舎(かしや)が中心で、すり鉢や甕などの日常雑器はわずかしきありません。これらの時期は 15 世紀初めを中心として、13 世紀から 16 世紀まで及ぶようです。

5. まとめ

寺院の中心的仏堂は保存状態がよくありませんでしたが、方形基壇とこれにつながる山門跡や参道が方位をそろえて配置されていること、出土遺物にすり鉢などの日常雑器が少なく精良な瓦質土器がめだつことから、これらは中世寺院跡と考えられ、背後に墓地空間があることもここが寺院であることを示唆しています。伝承地名でいう能仁寺の遺構と考えてよいと思われます。

第七代京極高詮(たかのり)は応永 8 年(1401 年)に亡くなっており、能仁寺がこの前後に創建されたとすると、遺跡から出土した土器類の年代観とも矛盾しません。

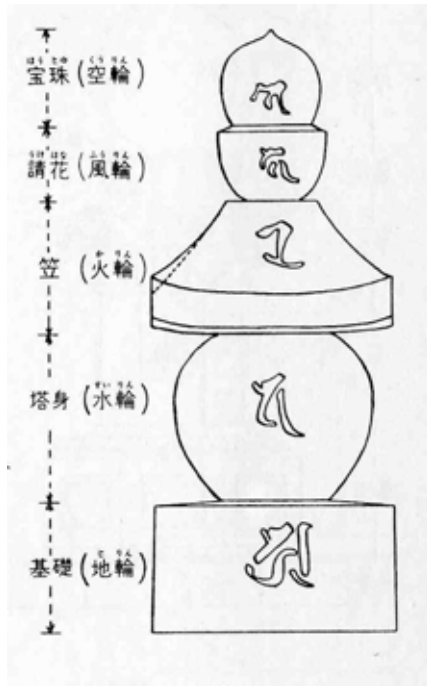
なお、能仁寺の名は史料にみられません。寺伝に伝わる高詮の戒名「能仁寺殿乾嶺浄高大居士」に、能仁寺の名を見ることができます。

初代氏信(うじのぶ)の戒名には清滝寺(清滝寺殿道善武算大居士)、第五代高氏(たかうじ)(道誉(どうよ))には墓所が伝えられている甲良町の勝楽寺(しょうらくじ)の名がつけられています(勝楽寺殿徳翁道誉大居士)。また、京極家墓所は第二十二代高豊(たかとよ)が寛文 12 年(1672)に整備するとともに第二十一代高和(たかかず)の墓を造営しましたが、徳源院の名は高和の戒名「徳源院殿傑山道英大居士」に由来します。このように、京極氏当主の戒名にはしばしば寺院名がつけられ、菩提寺・墓所の所在を示しているようです。第八代高光(たかみつ)(勝願寺殿)の墓所は清滝内の勝願寺伝承地(ジョガンジ)に、第十代高数(たかかず)(満願寺殿)は近江長岡駅付近の満願寺に墓所が推定されています。こうしたことから、能仁寺遺跡は第七代高詮の菩提寺と考えられ、寺域内に墓所があってよいのですが、その遺構は現在はまだ明確ではありません。

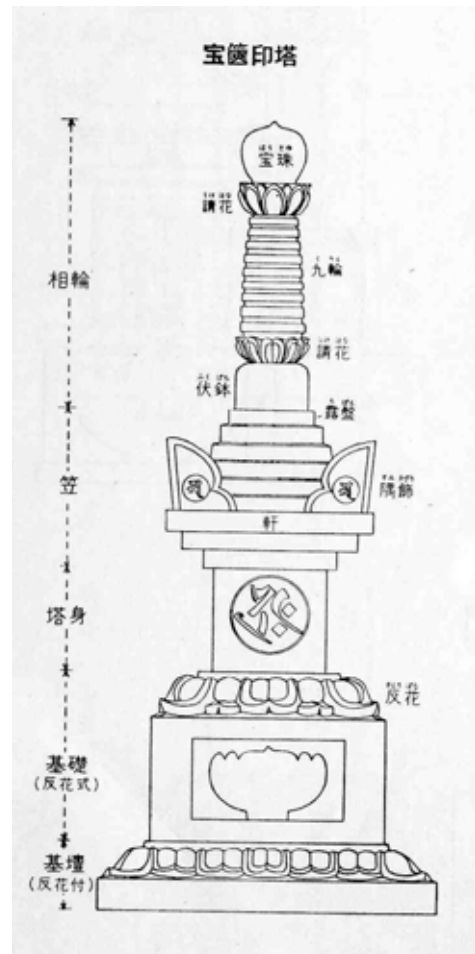
井伊家などの近世大名の歴代墓所は各地で知られているところですが、中世の守護大名の墓所のようすは、近世に整備・移築したものを除いてほとんど知られていません。能仁寺遺跡では墓所の遺構は明確ではありませんが、守護大名の菩提寺に関連する遺構を明らかにした点で貴重な資料となります。

参考解説

解説 1 五輪塔 (ごりんとう)



解説 2 宝篋印塔 (ほうきょういんとう)



解説 3 近江源氏 京極氏 (おうみげんじ きょうごくし)

京極氏は宇多天皇の系譜を引く近江源氏の一族です。平安時代に近江国佐々木庄(現東近江市小脇周辺)に土着して佐々木氏と呼ばれるようになり、源頼朝の拳兵に功績があったのを認められて佐々木定綱は鎌倉幕府から近江国惣追捕使(そうつうびし)(守護)に任じられます。しかし、承久の乱(じょうきゅうのらん)(承久3年(1221年))ののち惣領家(そうりょうけ)は領地を分割され、大原氏(坂田郡大原庄)、高島氏(高島郡朽木庄)、六角氏(佐々木宗家)、京極氏(坂田郡柏原庄)の四家に分裂しました。

氏信を始祖とする京極氏は、第五代高氏(道誉)が室町幕府成立に功績があったことから、六角氏に代わって一時的に近江守護に任じられます。また、能仁寺遺跡の被葬者と推察される第七代高詮は、明德の乱の鎮圧に功績があり、飛騨・出雲・隠岐の守護に任じられました。山名・一色・赤松とならんで侍所所司(さむらいどころしよし)を務める四職(ししき)と定められたのも高詮の代で、幕府における京極氏の地位を確立しました。

京極氏は近江南部に勢力をもつ六角氏とつねに対峙し、応仁の乱では激し

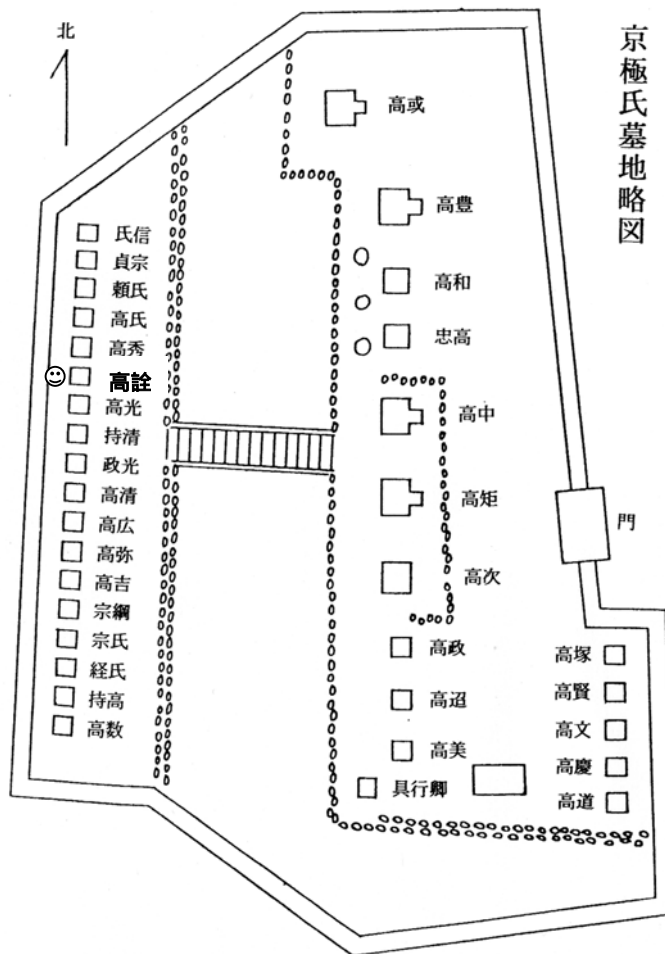
く対立して第十一代持清は六角氏をしのぐまでに勢力を拡大しました。しかし、彼の死後は勢力を落とし、やがて北近江を実質的に支配する地位は守護代の浅井亮政(あさい すけまさ)に代わられます。

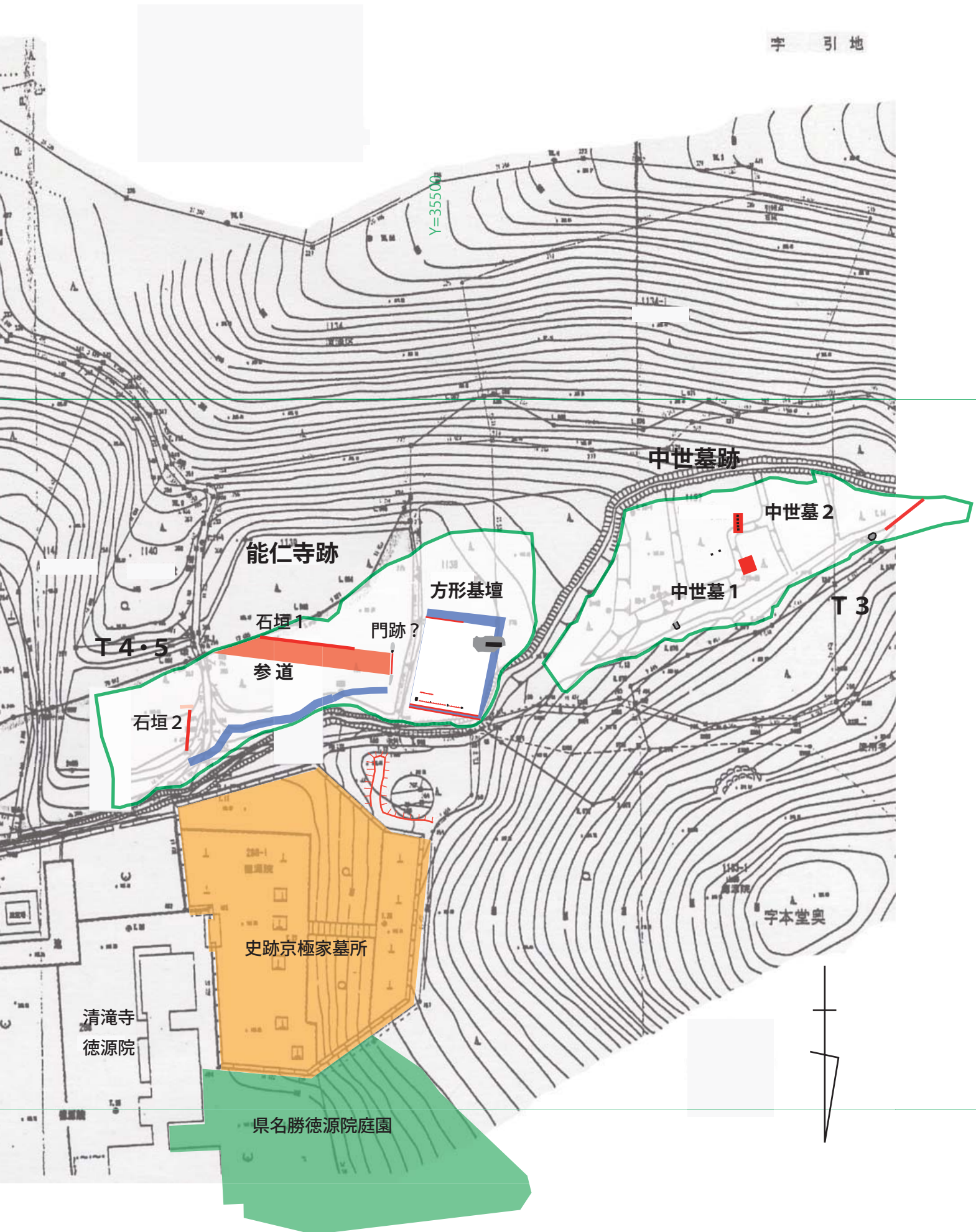
織田信長が浅井氏を滅ぼしたあと、第十九代高次(たかつぐ)は信長・秀吉に仕えて京極氏の中興をはかります。高次には信長の姪で淀君の妹であるお初が嫁いでいます。関ヶ原合戦では東軍(徳川方)につき、合戦直前まで大津城に籠城して西軍が関ヶ原に到着するのを阻止した功績をもって若狭に封じられました。江戸時代には第二十一代高和が丸亀藩に転封され、幕末にいたります。

解説 4 清滝寺徳源院(きよたきでら とくげんいん)

清滝寺は鎌倉時代に柏原(かしわばら)を根拠地とした京極氏初代当主氏信の菩提寺として建立されたと伝えられています。また、かつては参道の両側に十二坊の塔頭(たっちゅう)が建ち並んでおり、その区画は現在も残されていて当時の繁栄がしのべれます。

現在の清滝寺徳源院には歴代当主の宝篋印塔が並べられ、第十九代高次の宝篋印塔は石廟に、第二十二代～第二十五代の高豊・高哉・高矩・高中は木造墓堂に覆われています。一帯は京極家墓所として国史跡に指定されています。この墓所は寛文12年(1672年)に第二十二代高豊が清滝寺の復興をはかって整備したもので、三重塔(県指定文化財)を建立するとともに、散在していた宝篋印塔を集めて順序を正したものです。徳源院の名は高豊が造営した第二十一代高和の戒名に由来します。





能仁寺遺跡発掘調査概要図

S=約1/650



T 3 中世墓 2



T 3 中世墓 2 復元状況



T 4・5 方形基壇と参道



T 4・5 方形基壇 南辺石列



T 4・5 方形基壇南西部 板の埋設と香炉



T 4・5 方形基壇南西部外 槽あるいは木槨